

実践報告

小学生を対象としたいのちの授業を行った看護学生の学び

Learning of Students Nurse by Life Education for Elementary school Children

佐藤 いずみ¹⁾

Izumi Sato

中村 幸代¹⁾

Sachiyo Nakamura

竹内 翔子¹⁾

Shoko Takeuchi

宮内 清子¹⁾

Kiyoko Miyauchi

キーワード : いのちの授業、看護学生、小学生

Key Words : Life education, Nursing student, Elementary student

I. 緒言

近年、マスメディアにおいて子どもたちの小中学生のいじめ、自殺という社会的問題、生命の尊厳に関する倫理的問題、性に関する多様な考え方など「いのち」にかかわる多くの問題が報道で取り上げられている。このような現状を踏まえ、わが国では子どもの発達段階に応じてその時期の特徴と重視すべき課題を明確に打ち出しており、小学校高学年には「自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養」が重視すべき課題の一つとして挙げられている。そのため小学校高学年には自他ともに唯一無二の命を持つ存在であること、互いを尊重し合うことができる気持ちを持つことができるよう意図的にかかわることが必要であると考え。このような取り組みに関する報告は、生命に寄り添う職業の助産師が地域の小学生を対象に生命の誕生を伝える授業を企画する「いのちの授業」(丸山,2011)、新生児科医が高校生(模擬学生)を対象に救命できない新生児障害とともに生きていく新生児について語る「新生児科医だからできるいのちの授業」(菅谷,2013)、医学部学生が小学生を対象に救命処置法実習を行う訪問授業(青木,2007)の報告がみられている。いずれも講義や体験、クイズなどが交えてあり対象年齢を考慮した実施方法が示されていた。一方、看護学生が小学校高学年を対象に実施した性教育(濱田,2006)では、学生に対して大学教員が助言をし、性教育に必要な資料、媒体の提供をすることで授業が専門的知識及び豊富な教材を使用

して実施できるという利点があると報告されている。また、看護学生による健康教育(根来,2015)では、小学生が看護学生との交流をうれしと感じ「ていねいに優しく質問に答えてくれてすごうれしかった」と報告されていた。そのため、現在、看護基礎教育を受ける看護学生が小学生を対象にいのちの授業を行うことは知識、技術、態度に加え、必要な教材を活用できるという側面からも効果的ないのちの授業ができると予測される。

これまでに A 大学において看護学生におけるいのちの授業が実施されていた。実施の概要は次のとおりである。授業の実施は B 自治体において平成 18 年に「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム」の一部として小学校からの要望である「看護の視点からアプローチしていのちの大切さを教えてほしい」という要望に応えるものとして始まった。A 大学には学生が行う地域貢献授業に対し、年に 1 度有識者の審査を受け活動内容が評価されると助成金を得ることができるシステムがある。学生は活動費をこのシステムから得ている。母性看護学に興味がある学生や助産師を志す学生、いのちの授業に興味のある学生が有志で参加する。A 大学におけるこの活動は過去 9 年間の実施実績がある。毎年数か所の小学校から授業を実施してほしいという依頼を受けていることから A 大学におけるいのちの授業の実施により地域の小学生が効果的に学習できていると考えられる。

一方で、このような小学生に対する授業の実施により看護学生自身も学びを深めているという報告があり、看護学生による

Received : October. 31, 2016

Accepted : February. 21, 2017

1) 横浜市立大学医学部看護学科母性看護学

健康教育の実施においては、対象理解、小学生における行動変容の方略習得、大学生自身が新たな力の発見をすることができた6)という報告がある。しかし、A大学においては看護学生が小学生に対していのちの授業を行うことで看護学生がどのような学びをしたかについて明らかにしていない。A大学におけるいのちの授業の実施は、学生自らが仲間を募り実施していることであるがこの活動により学生にとって学びがあることを報告することはいのちの授業が今後より発展する可能性や、学生自身が自ら学ぶ姿勢について示唆を得ることができる可能性がある。

そこで本研究の目的は、看護学生が小学生に対して行ういのちの授業の実践を通じて得た学生の学びを報告することである。

II. 方法

1. 授業対象及び実施者

関東に位置する政令指定都市にある小学校の5年生男女を対象に、4年制看護大学の学生14名が主体となり実施した。助産師の有資格者であり母性看護学を専門領域とする大学教員が授業の準備から終わりまでオブザーバーとして参加した。

2. いのちの授業を実施する実施者の準備と目標

いのちの授業実施に向け、平成28年度のいのちの授業の

代表学生が看護学科1～3年生を対象にメンバーの募集を行い約20名が集まった。学生は「平成28年A大学 学生が取り組む市域貢献活動支援事業」の審査会で審査を受け活動が採択され助成金を獲得した。授業実施前にメンバー全員で、授業案、媒体作成、体験型学習が効果的に実施できるようファシリテートする方法や内容の洗練を行った。母性看護学教員はいのちの授業を実施する学生が「異年齢の対象を理解し対象のニーズに合った授業を行うこと」、「対象にとって最も学習効果の高い方法で授業を企画・構成すること」、「いのちの授業を通じて看護に興味を持つ」「看護学生自身が自己の価値に気付く」の4つに焦点を当てサポートした。いのちの授業実施にあたり小学校との打ち合わせ後、学生が最終的に立案した授業実施目標を(表1)、そしていのちの授業の対象となる小学生の学習目標を「いのちの大切さを感じ取り、生命の誕生に関する理解を深める」、「この世に生を受け誕生し、自ら成長し、人の支援を受けながら現在に至っていることについて考え、自尊感情や他尊感情が芽生える」と立案した。

事前に対象となる小学生に、いのちの授業の代表者が小学校の責任者である学校長にいのちの授業を実施したい旨を申し入れた。学校長とクラスの担任が話し合い実施に関する内諾を得た。その後、いのちの授業の代表を務める学生と副代表、大学教員が直接会っていのちの授業の概要を説明し正式に実施の許可を得た。その際、特別な配慮が必要な小学生について確認した。具体的には、いのちの授業の進行にあたり、産

表1 いのちの授業実施目標と授業内容及び方法

1 児童の想像力に働きかけ、児童が各々の命の尊さに気づくことができるための機会を提供できる。			
2 対象の特性を知り、対象の理解力や興味にあった効果的な授業を実施する能力を習得することができる。			
3 魅力的で継続される授業に発展させることができる。			
実施課程	授業内容	授業方法	所要時間
導入	・学生自己紹介、教員の紹介 ・授業の趣旨説明 ・授業の具体的内容と進め方	・小学生に看護学生および助産師の背景を知り、本時のねらいの大枠を感じとってもらう ・小学生に本時のねらいを明確に理解してもらう ・小学生に本時の展開を理解してもらう	2分
展開Ⅰ (講義)	・妊娠成立過程 ・受精 ・受精卵から成人へ成長する過程	・小学生に子宮の位置を提示/デモンストレーションで卵子・精子の出会いから自分や友人の命が尊いことを理解してもらう ・小学生に動画視聴/カード(女性のイラスト腹部に針で穴を開け花の香りをつけたもの)を用いて精子が卵子に向かい受精するメカニズムを理解してもらう ・小学生に担任教員の幼少期から成人に至る写真を見せ成長を実感してもらう	20分
展開Ⅱ (講義)	・胎児の成長 ・母親と胎児 ・妊娠中の親の気持ち ・マタニティマークとは ・あなたが生まれる確率	・小学生に月齢別胎児モデルを見てもらい10か月間の成長や発達を理解してもらう ・小学生に妊娠中の教員の胎児心音を超音波ドブラーで聴取した心音により胎児の存在を実感してもらう ・小学生に妊娠中の母親が子どもへ抱く気持ち/夫立ち合い分娩を経験した教員の思いを理解してもらい、自分が愛されて生まれたことに気づいてもらう ・小学生として妊婦にできるいたり心遣いを自覚してもらう ・小学生に父と母、自分の組み合わせで家族になれた希少性を数値化し自分が存在するだけで価値があることに気づいてもらう	23分
展開Ⅲ (体験)	・ベビーマッサージ ・おむつ交換・抱っこ体験 ・妊婦体験 ・バイタルサイン測定	・小学生にベビーマッサージの効果(泣きの減少、心身の安定、スキンシップ)を説明し新生児媒体を用いてオイルを使いながら赤ちゃんに深くスキンシップしてもらうことで小さな子供への興味と理解を深めてもらう ・小学生に新生児の世話について理解しこれまでに多くの方に自分がかかわってもらい成長したことに気付いてもらう ・小学生に妊娠中の身体的負担や妊娠した時の身体運動の制限や、妊娠中の母親の疑似体験をして自分を産んでもらうまでの母親の気持ちに気付いてもらう ・小学生に新生児の心拍数、呼吸数が自分たちより早いことを理解し、自分の成長の実感と新生児の身体的未熟性を理解し、守ってあげなくてはならない存在であることに気付いてもらう	37分
展開Ⅳ	・ある家族の出産シーンの動画を見る ・生徒同士がお互いに向き合えるよう大きな円になって座ってもらう ・まとめ	・小学生に自分が生まれるためには家族の存在があったことを理解してもらう ・小学生に同級生という他者も唯一無二の存在であることについての理解を促し自己、他者ともに尊重の意識を持つことが理解できる ・小学生に対し本授業に参加してくれたことに感謝し終了する	8分

みの親に関する文言を使用することで不快感を持つ可能性のある小学生はいないか、90 分の授業のうち配慮すべき点がないかなどである。また、小学生がより身近な存在と感じている小学校教員から協力を得ることで対象の興味を惹くように、各クラスの担任教員の成長発達のわかる写真の提供(幼少期から成人期まで)の依頼、身体にいのちを宿すということに関する理解を促すため妊娠している教員に妊娠中の気持ちを語ってもらうこと、超音波ドプラーの音源を用いて対象小学生全員で胎児心音を聴取させてもらうことを依頼した。また、親の気持ちを理解してもらえるように、子を持つクラス担任により立ち合い分娩の経験やわが子の成長に関する親の気持ちを語ることに協力してもらうよう依頼した。各クラス教員に了解を得たのち授業参加に向けて準備をしてもらった。その他、対象となる小学生の父母がいのちの授業に自由に参加して構わないことを担任教員から父母に周知してもらった。

写真 1 精子の媒体作成



3. 授業の実際

授業参加者及び授業実施者は、小学校 5 年生男女 63 名、4 年制看護大学の看護学生、1 年生 3 名、2 年生 2 名、3 年生 9 名、計 14 名、母性看護学教員 3 名、小学校教員 3 名(女性 2 名、男性 1 名)であった。小学校における特別授業として 90 分の授業を行った。授業の実施方法の詳細については表 1 に示すとおりである。

前半 45 分は講義とし、緊張する小学生の気持ちがほぐれるよう導入を行った。次に、受精から成人へ成長する過程に関する知識の提供として卵子や精子の模型を使ったデモンストレーションを行った。その後、母親の体に命が宿り子どもたちはそれぞれが親や大人に大事に育てられてきたことを伝え、ストーリー性を重視しながら講義をすすめた。妊娠中の母親について話す際には、小学校教員の協力を得て胎児心音の聴取し妊娠中に親が抱くわが子への気持ちを語ってもらった。男性教員からは夫立ち合い分娩の経験談や子育てについて語ってもらった。小学生らは常時、興味深く聞くことができ、質問には積極的に答えていた。また、実際に胎児心拍音が聞こえると歓声を上げていた。その他、新生児との触れ合いを促すために、妊

婦体験、新生児のベビーマッサージ、抱っこ、おむつ交換を実施し、「自宅でも自分のきょうだい(乳児)にベビーマッサージをしたい」という声があった。最後に、自分が生まれてここまで成長するためには家族や社会の協力があつたこと、クラスメイトも同様に同じように大事に育てたこと、だからこそお互いの命を大切にすることを互いに認識し合い、小学生全員がお互いの顔を見つめ合い笑顔で授業が終了した。授業実施中において配慮の必要な小学生はなく終了した。

学生は対象となる小学生の反応をみながら話し方を工夫したり、寄り添って丁寧に話しかける様子が見られた。

写真 2 ある家族の出産シーン



写真 3 おむつ交換の体験



4. いのちの授業実施後の評価

いのちの授業を実施後、学生にいのちの授業実施の学びについて自由に語る場所を設けた。研究代表者が同席し、参加した学生 1 人 1 人が順番に話せるようファシリテートした。その際、ボイスレコーダーを用いて録音することについて学生全員

から許可を得て録音を行った。録音したデータはインタビューの内容をもとに逐語録を作成し得られたデータを繰り返し読み、いのちの授業を実施した学生の学びに関連する内容や文脈的意味付けを見出し類似性に基づいて主要となるテーマを導き出した。意味づけについては必要時研究参加者に確認するとともに分析過程において母性看護学研究者とともに分析した。

5. 倫理的配慮

小学生への同意は、研究の代表者が授業を実施する前に学校責任者及び対象となる小学生の担任に文書及び口頭にて実践報告の趣旨を説明し許可を得た。実践報告の協力にあたり参加及び撤回における自由意思の尊重と学校が特定されないよう配慮し、公表に関しては匿名性とプライバシーを守ること保証した。

看護学生への同意は口頭にて実践報告の趣旨を説明した。授業を実施した2時間後に行った反省会の内容を録音し実践報告に使用することについて同意を得た。実践報告の協力にあたり参加及び撤回における自由意思の尊重と学校が特定さ

れないよう配慮し、公表に関しては匿名性とプライバシーを守ること保証した。

Ⅲ. 結果

1. 学びの内容

いのちの授業実施後、学生には実施した授業を振り返り学生自身が学んだことについて自由に語ってもらった(表2)。

学生の学びに関する主要なカテゴリーを抽出した。抽出されたカテゴリーは目的を明確に持って伝える:目的を明確に持っていないと半分も人に伝わらない、授業内容が洗練し順序性が明確になる過程:メンバーが自主的に参加し、協力し意見を出し合い、授業内容が洗練し順序性が明確になる過程、プロや熟練者の技と語り:プロや熟練者が聞かせてくれる胎児心音、子どもへの声掛け、授業では聞かせてもらえない親の子に対する気持ち、小学生の純粋な反応、早い変化:小学生の受け止めきれないほど純粋な反応、学んだベビーマッサージをすぐに家でやってみたいという早い変化、幸せとは言え

表2 いのちの授業実施後の学生の学び

カテゴリー	コード
【目的を明確に持って伝える】 目的を明確に持っていないと半分も人に伝わらない	・目的を明確に持っていないと半分も人に伝わらない。 ・看護の先生も明確な目的があって授業をしてくれても私たちは全部は吸収しきれていない。 ・先生が明確な意図を持って授業をしてくれるから伝わる。 ・自分も自分が講義すると伝え方がわかる。
【授業内容が洗練し順序性が明確になる過程】 メンバーが自主的に参加し、協力し意見を出し合い、 授業内容が洗練し順序性が明確になる過程	・3年生として参加するときは準備期間から頑張りたい。 ・意見が多く出て活発にかかわりあえた。 ・(いのちの授業を大切にしたいという)その思いに後輩がついてきてくれた。 ・(いのちの授業を継続して行っていくこと)これからもよくなると思う。 ・もっと前から参加すればよかったと思うほどだった。 ・みんなの授業に感動した。 ・(作成から実施が)楽しんでできた。 ・みんなで(授業を)作っていく感じ。 ・先輩が意見を出し合っているところを見て授業内容が洗練していく過程が分かった。 ・(授業に)順序性が出てきた。
【プロや熟練者の技と語り】 プロや熟練者が聞かせてくれる胎児心音、子どもへの声掛け、授業では聞かせてもらえない親の子に対する気持ち	・(小学生の前で実際に胎児の心音を聞くのが)よかった。 ・お母さんの本当の音が聴けて感動した。立ち会ったお父さんの気持ちが聞けた。授業では聞けない。 ・(胎児を宿しているときの気持ちの表現を)「10か月もキラキラが続くの!」と小学生に担任の先生話っていたように、自分も(相手にわかる)声のかけ方を真似しようと思った。 ・子どものわかる声掛けの仕方に専門性を感じた。 ・プロとか熟練者の実際をみないとわからないことだった。
【小学生の純粋な反応、早い変化】 小学生の受け止めきれないほど純粋な反応、学んだベビーマッサージをすぐに家でやってみたいという早い変化	・小学生の前に立ち小学生が3か月の児を見た反応を見れたこと。(よかった) ・子どもの反応をみれた。小学生で本当の心臓の音を聞く小学生の反応が見れてよかった。 ・伝えたいことがしっかりしていたせいか、子どもたちの反応(驚き、喜び)がみられた。 ・ベビーマッサージをした小学生が家に帰ったらやろうといっているところが聞けてよかった。 ・患者さんと向き合っていたいのちの大切さを学んだが今回は小学生向き合えてよかった。 ・感想として小学生の反応が良くてうれしかった。 ・反省点としては、小学生が純粋に反応したことに対して十分に受け止めきれなかった。ほかの場所ではよりコミュニケーションのある授業にしたい。 ・(授業を)実施して、弟(乳児)にベビーマッサージしたいという反応が聞けたとき自分たちのメッセージが伝わったと思った。
【幸せとは言えない子供の側面】 小さい子どもと触れ合いがないことや、全てが幸せとは言えない子供の側面	・小学生の立場で考えることができた。 ・教える以前に相手を理解することが大事。 ・少子化が進み本当のきょうだいがいない場合このような授業が受けられることはいいと思う。 ・授業の台本を考えるときに誕生はプラスのイメージがあったが子供によっては全てが幸せではない。 ・側面も理解でき、いのちの大切さを伝える困難性を理解した。
【新たな発見と伝えることができるという確信】 「看護学生がこんなことができるんだ」という新たな発見といのちについて小学生に伝えることができるという確信	・(いのちについて)伝えることに関われてよかった。 ・自信を持って伝えることができた。 ・いのちの授業に関われたことに誇りに思う ・自分も母性の勉強ができた。 ・看護学生がこんなことができるんだ(ということを知った)。 ・患者さんだけでなくこんなに看護の活動の場が広がったんだって思った。

ない子供の側面：小さい子どもと触れ合いがないことや、全てが幸せとは言えない子どもの側面、新たな発見と伝えることができるという確信：「看護学生がこんなことができるんだ」という新たな発見といのちについて小学生に伝えることができるという確信の6つであった。

IV. 考察

1. 目的を明確に持って伝える

学生は通常、教えられる立場にあるが、いのちの授業実施にあたっては教える立場になり「伝える」ことについて能動的に学ぶことができたと考えられる。なぜ、小学生を対象にいのちの授業を行う必要があるのかについて学生間で話し合い、いのちの授業の対象者である小学生の学習目標(表2)を立案した。しかし、学習目標を立案する際、学生が小学校教員に確認したことは主に配慮すべき小学生の情報であった。授業とはある状態にある学習者を学習目標まで引き上げることなので学習者がどんな状態にあるかについて把握することが必要とされ、これを学習者分析(市川,2014)と呼ぶ。学習目標を決めるうえで最も重要なのは学習者の前提条件、関連知識、学習意欲、学業レベル、学習方法の好み、クラスの特徴について検討すべきと言われている。学生の語りにあるように学生自身が目標を明確に持たなければ伝えることができないという学びをしていることから以降は、学生が学習者分析の視点に沿って小学生の情報得て、学習目標を設定するよう促すという大学教員側の課題も明らかになった。

2. 授業内容が洗練し順序性が明確になる過程

このカテゴリーには、「先輩が意見を出し合っているところを見て授業内容が洗練していく過程が分かった。」「授業に順序性が出てきた。」というコードがみられた。教材をどのように設計すべきかを検討するうえで体系的なアプローチ(鈴木,2012)という考え方がある。体系的なアプローチの3つの段階は「Plan-Do-See」という「Plan」：アイデアを練る、「Do」：実際の教材作り、「See」：作った教材を協力者に使ってもらい教材の効果を確かめるという作業である。そしてSeeからPlanへ戻り「トライ&エラー」の精神で3つの工程を繰り返すというものである。つまり学生は教材づくりが終わった時点で作業を終了することなく「Plan-Do-See」を繰り返して行った。最終的に学生は授業の内容を洗練過程について学び取ることができたと考えられる。

3. プロや熟練者の技と語り

このカテゴリーは母性看護学教員が助産師役となり児心音聴取をしたり、ご懐妊中の小学校教員が胎児への思いを語る、男性の小学校教員が子育てについて語るという場面からの学びが示されている。学生は大学における講義では体験できな

かった学びを基盤に、「胎児を宿しているときの気持ちの表現を『10 か月もキラキラが続く!』と小学生に担任の先生が語っていたように、自分も相手にわかる声のかけ方を真似しようと思った。」と述べている。カナダ生まれの米国心理学者 Albert Bandura は 1977 年に出版した「社会的学習理論」(バンデューラ,2012)の中で可能予期について述べている。可能予期の誘導様式は4つありそのうちの1つが代理体験である。他人(モデル)が経験したことを観察者がみることによって他人がやれることならば自分もできるだろうと認識することを指す。観察者とモデルの類似性は象徴モデリングの効果を高めると述べられている。学生は小学校教員が小学生にとって理解できる表現を選びながら話しかけている様子を見て、子どもと関わることを想定した自己像と照らし合わせて類似性が高いと認識した可能性があると考えられた。この学びは今後、学生が子どもと関わる際に良好なコミュニケーションをとるためのスキルにつながることを期待する。

4. 小学生の純粋な反応、早い変化

このカテゴリーには、「授業を実施して、弟(乳児)にベビーマッサージしたいという反応が聞けたとき自分たちのメッセージが伝わったと思った。」というコードがあるように、学生は、授業で習得したベビーマッサージを実際にきょうだいに行ってみいたいという小学生の言動から、小学生がベビーマッサージを実際にやってみいたいという気持ちに導くことができたと認識している。学生はベビーマッサージを実施する前に効果や利点について説明を行っており小学生はベビーマッサージを行うことで「弟にとって良い効果があるだろう」と肯定的な予期をした可能性がある。人の行動決定の先行要因は、可能予期と結果予期に分けて考えられ(バンデューラ,2012)このように結果予期が肯定的であれば行動変容が起きやすくなると考えられている。学生は、小学生にどのようにかかわれば行動変容が起きやすいのかを学ぶことができたと考えられた。これは看護学生が小学生に対して健康教育を行ったときに学生の学びとして示された「小学生における行動変容の方略習得」(根来,2015)と類似した結果であった。

5. 幸せとは言えない子供の側面

このカテゴリーには「教える以前に相手を理解することが大事」というコードに示されるように一方通行の教授ではなく教える相手を理解したいという姿勢がみられた。また、学生は「授業の台本を考えるときに誕生はプラスのイメージがあったが子供によっては全てが幸せではない側面も理解でき、いのちの大切さを伝える困難性を理解した。」と述べている。事前の準備では家庭環境等に特別配慮すべき小学生はいないという情報を得たにもかかわらず学生は、小学生に対して十分な配慮をして授業準備を行う必要があると考えたと思われる。これは、単に対象を知ることによって留まらず学生が小学生を一人の尊

厳のある存在としてかわることの重要性を認識していたためであると考えられる。学士課程の卒業時到達目標(文部科学省,2011)におけるヒューマンケアの基本に関する実践能力では「看護の対象となる人々の尊厳と権利を擁護する能力」が示されている。学生は対象となる小学生が持つ文化的背景、価値観、信条を尊重すべきという考えを持ち、いのちの大切さを伝えるためには十分な配慮が必要であるという学びすることができたと考えられる。

6. 新たな発見と伝えることができるという確信

このカテゴリーには、「自分も母性の勉強ができた。」「自信を持って伝えることができた。」というコードが含まれている。いのちの授業を通じて母性看護に必要な知識や技術の習得ができ自己の能力への気づきがあったことがわかる。アメリカの教育工学者である John M. Keller によれば、学習意欲を高める手立てには、注意「おもしろそうだな」(Attention)、関連性「やりがいがありそうだな」(Relevance)、自信「やればできそうだな」(Confidence)、満足感「やってよかったな」(Satisfaction)の 4 側面があるという。これを ARCS モデルの 4 要素とし授業設計研究者や心理学者による活用がみられ対象の学習意欲を高める作戦に活用すべきであることを提唱している(Keller et al,1987)。いのちの授業に興味を持ってもらうことで母性看護に興味を持ったり、母性看護学への学習意欲が高まる可能性があると考えられる。

V. 結論

看護学生が小学生に対して行ういのちの授業の実践を通じて得た学びは 6 個のカテゴリーとして抽出された。今回の結果から看護学生が小学生を対象にいのちの授業を行うことで多角的な学びを得ていることが報告できた。今後、いのちの授業が発展すること、学生が主体的に学ぶ意欲に働き掛けるための示唆を得ることができた。

謝辞

本実践報告に賛同し、ご協力くださいました小学校及び小学生の皆様にご心より感謝申し上げます。

文献

- 青木昭子, 後藤英司, 西井正造, 野村明美(2007). 医学部学生が小学生に「いのちを守る知識と技術」を教える 救命処置法実習を中心とした訪問授業実施報告. 横浜医学, 4,551-556.
- Bandura, 原野広太郎監訳(2012). 第 3 章 行動決定の先行要因, 社会的学習理論—人間理解教育の基礎—(オンデマン

- ド版)(65-104). 東京:金子書房
- 濱田維子, 小林益江, 佐藤珠美, 江島仁子(2006). 看護大学生ピアエデュケーターによる小学生への性教育活動の試み—年齢差のある対象へのピアアプローチとその評価—. 日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report, 5, 10-16.
- 市川尚(2014). 第 3 章 学習目標を明確にする～授業構想の検討～, 稲垣忠, 鈴木克明(編), 教師のためのインストラクショナルデザイン 授業設計マニュアル Ver. 2(27-37). 京都:北大路書房.
- Keller, J. M., & Suzuki, K. (1987). Use of the ARCS motivation model in courseware design. In D. H. Jonassen (Ed.), Instructional designs for microcomputer courseware. Lawrence Erlbaum Associates, Chapter 16, USA
- 丸山彩香, 黒川寿美江, 金子美紀, 山内淳子, 佐藤理恵, 上野杏子, 今村美代子, 有森直子(2011). 「助産師による生命の誕生に関する授業」の評価 参加した親子の体験の記述を通して. 学校保健研究, 53(2),158-163
- 文部科学省(2011). 大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会, 最終報告, 平成 23 年 3 月 11 日 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf (最終アクセス 2017 年 1 月 8 日)
- 文部科学省(2009). 子どもの徳育の充実に向けたあり方について(報告) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286156.htm(最終アクセス 2017 年 1 月 8 日)
- 根来佐由美, 上野昌江, 北川末幾子, 大川聡子, 和泉京子(2015). 大学と地域による協働活動 大学と小学校によるコラボレーション授業の評価. 大阪府立大学看護学部紀要, 21(1), 75-83.
- 菅谷真由佳, 小豆澤敬幸, 川瀬恒哉, 久保暢大, 佐藤恵美, 友滝清一, 依光映佳(2013). 新生児科医としてできる少子化対策 中学生・高校生に「いのちの大切さを伝える授業」を作ってみよう!. 日本未熟児新生児学会雑誌, 25(1), 85-87.
- 鈴木克明(2012). 第 2 章 教材作りをイメージする, 教材設計マニュアル 独学を支援するために(13-22). 京都:北大路書房.